平成13(2001)年度　日本語研修コース報告

留学生センター　和　田　礼　子

1．1　第2期（2001,4～2001,7）コース概要

開講期間：平成13年4月16日（月）～平成13年7月27日（金）

開講時間数：授業は週に15コマ（1コマ90分）

時　間	月	火	水	木	金
8：50－10：20	文　法	ドリル	応　用	ドリル	会　話
10：30－12：00	ドリル	会　話	ドリル	文　法	応　用
12：50－ 2：20	漢　字	作文＆スピーチ	特別指導	漢　字	漢　字

受　講　者：大使館推薦の国費研究留学生10名（フィリピン3名、タイ、コロンビア、トルコ、グァテマラ、メキシコ、パキスタン、ガーナ各1名）。
進学先は8名が鹿児島大学で2名が宮崎大学。
私費大学院生1名（ヨルダン）

使用教科書：Situational　Functional　Japanese　Vol.1,2,3（筑波ランゲージグループ）
Total Japanese Reading and Writing（早稲田大学）

コース日程：

4月3日～13日　プレ・セッション（ひらがな、あいさつ指導）
4月11日　オリエンテーション
4月16日　授業開始
5月1日　市内見学バス旅行
5月18日、19日　多国籍合宿参加
6月22日　日本文化体験　書道教室
7月11日～15日　オープンクラス（指導教官による日本語授業参観）
7月26日　修了式　スピーチ、作文発表

1．2．1　既習者の受け入れ

研修コースは大使館推薦国費留学生を対象に開講されたが、第2期は該当者が10名で、この中には予備教育修了後宮崎大学農学部にすすむ2名も含まれていた。第2期は教室定員12名に満たなかったため申請のあった大学院生（私費留学生）1名の受講も許可した。コースの途中で1名が一時帰国したため、最終的なコース受講者は10名となった。

学生のレベルは自国で日本語を学習したことのある者1名と、1年前に短期交換留学生として鹿児島大学に在籍した者1名の、2名が既習者で、他は全てひらがなから始める初学者だった。既習

者にはプレースメントテストの結果をふまえて１名にはコース開始１ヵ月後にクラスに合流することを薦め、それまでは一般コースの初級２のクラスと水産学部の日本語クラスを受講することにした。もう１名は本人の希望もあり、最初から研修コースに参加した。この既習者２名はクラス活動にとても協力的で、既習の事項でも先走ることなく他のクラスメートの学習を牽引してくれた。

既習者がゼロ初級のクラスで学習する場合、コース終了時には初学者が既習者を追い越してしまうということがよくある。授業は簡単だという先入観から十分な練習を怠り、語彙だけは豊富でも文法的には整理されず、結果的に総合的な日本語力が伸びないことがある。既習者からすれば「他の学習者よりも自分の方が日本語力がある」「レベルの低いクラスで学習させられる」といった理由から学習意欲が落ちてしまうのだろう。「不適切なクラスに配置された」といった不満から教師に対する信頼が失われることもある。

しかし、第２期の既習者にはこのことは当てはまらなかった。既習者２名のうち１名は研修コースの授業にも出席しながら、一般コース初級２のクラスと水産学部の日本語クラス、それに漢字２の受講を続け、着実に日本語力を伸ばした。この学生の週あたりの受講コマ数は21コマ（１コマ90分）だった。

１．２．２　オープンクラスの実施

このコースではコース修了前にオープンクラスを１週間実施した。これは、学生の指導教官と、留学生センターの運営委員に日本語の授業を見てもらおうというもので、１週間で７名の先生に授業を見てもらい、評価、感想を聞いた。

このオープンクラスを行った意図は①留学生センターの日本語の授業を見てもらうことで、日本語教育への理解を深めてもらう②学生を研究室に受け入れる前に学生の日本語力を知ってもらう、という２点であった。授業見学後のアンケートを見ると概ね日本語クラスに対して好意的な評価を得ている。授業に対するコメントとしては「（授業を見て）学生が短期間に日本語が上手になる理由がわかった」「（言語教育の観点から）さまざまな手法を使って進められる授業は、とてもよかった」といった、ありがたい評価がある一方で「教室環境が悪い」「学生の理解に差がある」といった意見もあった。

教室は大教室をパーテーションで仕切り、半分を教室、半分を事務所として使っており、防音上、またスペース上の問題があった。これは第３期生からは総合教育研究棟の教室を借用することができるようになり、教室環境は改善の方向に向かったと考えている。

また学生の理解度に関する問題だが、学習項目に対して導入時点での理解の差、運用時点での巧拙、定着の度合いと、学生個々の能力には差が出てくるが、この第２期生はクラス運営に支障をきたすほどの差ではなかった。授業についていけない学生がいるわけではなく、設定レベルより高いレベルの学習者がクラスに在籍したことによって生まれた差であると考えられる。

学生の側からは指導教官にクラスを見てもらったあと、「教官と日本語で話す頻度が増えた」「自信がついた」「指導教官が自分のために時間をさいてくれてうれしかった」などのコメントが聞かれ、

指導教官と学生の信頼関係を支えるといった思わぬ効果も得られた。

しかし一方で一週間にわたって、ゲストがクラスを訪れるというのは、学生に長期の緊張を科すことになり「ちょっと疲れた」という意見も聞かれた。今後何らかの改善策を考える必要がある。

1．2．3　クラスの協力体制

このクラスの構成員はほとんどが文部科学省の国費留学生で、研究領域が違いこそすれ、他のバックグラウンドに共通点が多く、総じて非常にまとまりのよいクラスだった。宗教の問題などについても皆わきまえていて、互いに相手を尊重していたし、開講当初は会館で自主的に学習会を持つなど学習上、生活上の問題点を自分たちで解決する方法を知っていたようだ。このような協力的なムードはコース終了時まで続き、このことがコースに対する満足感にもつながっていると思う。

語学教育を行う場合、クラス内のこのような友好関係は研修コースのように毎日３コマ顔を合わせるクラスでは非常に大きなプラス材料となる。どんなに優れた教材、優れた教授陣でも、仲の悪いクラスでは十分な成果が得られないことが多い。コミュニケーションが重要な教室活動となる語学教育ではこのような心理的要素が非常に大きな意味を持つと思われる。

2．1　第３期（2001,10～2002,２）コース概要

開講期間：平成13年10月15日（月）～平成14年２月15日（金）

開講時間数：授業は週に15コマ（１コマ90分）

開講科目と時間

時　間	月	火	水	木	金
8：50－10：20	文　法	ドリル	応　用	ドリル	会　話
10：30－12：00	ドリル	会　話	ドリル	文　法	応　用
12：50－ 2：20	漢　字	作文＆スピーチ	特別指導	漢　字	漢　字

受　講　者：大使館推薦の国費研究留学生１名（ミャンマー）進学先は宮崎大学。

国費教員研修生３名（ミャンマー、インドネシア、アルゼンチン）

配置先は鹿児島大学２名、宮崎大学１名。

大学推薦の国費研究留学生１名（パプアニューギニア）。

大学間協定に基づく短期留学生４名（タンザニア３名、インドネシア１名）。

JAICA研修生１名（ベトナム）

大使館推薦の国費研究留学生１名（2002年春コース途中帰国者）（タイ）

開講レベル：日本語学習歴がゼロの学生を対象とする。

使用教科書：しんにほんごのきそ１,２（スリーエーネットワーク）

Total Japanese Reading and Writing（早稲田大学）

日　　程：

10月３日～17日　プリセッション（ひらがな、あいさつ指導）

10月12日　　オリエンテーション
10月18日　　授業開始
10月31日　　市内見学
12月17日～21日　スピーチウィーク
1月7日　　日本文化体験　書道教室　書き初め
2月15日　　修了式スピーチ、さくぶん発表

2.2.1　研修コース受講者の公募

第3期は国費留学生と教員研修生合わせて5名だったため学内公募をし、短期留学生4名とJAICA研修生1名がコースを受講した。学内公募に関してはこの第3期から募集要項を整え、これにのっとって募集を行った。

鹿児島大学留学生センター初級研修コース　受講者公募要領

1．研修コースは大使館推薦による大学院入学前研究生を対象に開講されるが、次期研修生が確定した段階で、教室収容定員12名に満たない場合、不足人数分を学内公募する。
2．公募の時期は3月、9月とし、両月とも20日を締切り日とする。
（＊休日の場合は翌日を締切り日とする）
3．応募資格
1）大学推薦による大学院入学前研究生。
2）協定校からの短期留学生。
3）その他の研究生。
4．応募条件
1）日本語学習歴が全くないこと。
2）集中コースの午前の授業（プレセッションを含む、週10コマ）を、すべて受講すること。（研修中は日本語学習に専念すること）
3）指導教官の推薦があること。
4）プレセッション開始に間に合うように来日すること。
（プレセッションは4月／10月初頭、約1週間）
5．応募先は留学生課とし、選考は留学生センターが行う。本人が渡日前の場合、指導教官が代わりに応募できる。
6．選考方法
原則として書類審査。場合に応じて指導教官、及び本人へのインタビュー（電話または面接）、適性テストを行う。

研修コースは授業数が多いため、これをすべて受講できる学生は限られており、結果的に短期留学生などが中心となるようだ。

2.2.2　教科書の変更

第1期、第2期と「Situational　Functional　Japanese（筑波ランゲージグループ）」を主教材として使用してきたが、この教科書は新出語彙の訳、文法説明が英語でかかれている。これは英語がよくできる学習者にはいいのだが、あまり英語のできない学習者にとっては、外国語を使って外国語を学習することになり、かなりの負担が予想される。中には英語のほうに注意が奪われ、肝心の日本語に十分時間がかけられないという問題も出てくる。第3期生の中には英語があまりできない学習者が数人いたため、訳、文法解説が多国語対応になっている「しんにほんごのきそ（スリーエーネットワーク）」を主教材とすることにした。

「しんにほんごのきそ」は技術研修生のために開発された教科書で、「研修生」「工場見学」などの語彙や「スイッチに触らないでください」といった例文が多く見られる一方、大学生活に必要な「専門」「指導教官」などの語彙は収録されていない。また、「Situational　Functional　Japanese」が重視していた伝達（会話）能力をひきあげるための会話ストラテジーなどが教授項目にあまり含まれていない。教科書選定にあたってはこのような点が問題となったが、補助教材の形でこのような要素を取り入れていくことで解決を図った。

「しんにほんごのきそ」には姉妹版で「みんなのにほんご」という教科書があり、こちらは技術研修生ではなく、一般を対象にしたもので会話のストラテジーなども組み込んであるが、各国語訳が「しんにほんごのきそ」に比べて少なく、第3期生の言語にも対応していなかったため最終的には「しんにほんごのきそ」に決定した。

「しんにほんごのきそ」は教科書対応の訳、文法解説だけでなく、読み教材、作文教材、問題集など副教材が充実しており、このコースでも各課毎に多様な課題を科すことができた。このため、第1期、第2期の学生に比べ、書くことへの抵抗は少なかったようだ。会話ストラテジーもできる限りスケジュールの中に組み込んだ結果、当初心配していた伝達能力も順調に身に付けることができた。

2.2.3　コンピューターリテラシー教育

第3期ではコンピューターリテラシーを授業の中に組み込んだ。これは第2期で試みたものをさらに拡充したものである。

この授業では日本語環境のコンピューターや、日本語ワープロソフトの使い方の説明を日本語で聞き、日本語入力の実習をおこない、最終的に作文集を作成した。通常、日本語の授業は文法に焦点をあてた授業にせよ、運用のための授業にせよ、目的はどちらも言語習得であるが、コンピューターリテラシーの場合、日本語はターゲットではなく手段になる。しかし、日本語を手段として使うというこの授業の中で学生はタスクを超えた真の伝達場面が与えられる。

この授業のターゲットは「日本語」ではなく「コンピューター」であるため、説明を聞いて実際にコンピューターが使えるようにならなければ意味がない。理解のためなら媒介語を用いるという方法もあるが、あくまでも日本語教育の一環としてこの授業を進めた。教師は自身のスピーチレベ

ルをコントロールし、使用語彙、文法などの点から理解可能な日本語で授業を進めた。

教室外での留学生と日本人の接触のように、全く制限のない日本語使用場面とは異なるが、通常の日本語クラスで行われる教室活動ともまた違った側面を持った授業となった。

授業の内容は以下の通りである。

1月16日　コンピューターの起動、日本語ワープロソフトWordの起動、
キーボードの説明、ローマ字での日本語入力の基礎。文書の保存。
・練習問題（冬休みの宿題で書いた作文を入力する。）

1月22日　文書を開く、コピー、貼り付け、切り取り、挿入、削除などの基本操作。
・練習問題（前回入力した作文を開き、間違いを修正する）

1月29日　アルファベット、数字、カタカナの入力、フォント、サイズの変換。
・練習問題（前回入力した作文を開き、間違いを修正する）

2月5，6日　インターネットの写真をコピー、サイズ変更、貼り付ける
・作文集作成

2月12，13，14日　作文集作成

この授業で作成した作文集はコース終了時に行うスピーチ発表の際、来場者に配布した他、指導教官、留学生センター運営委員にも配布した。この作文集を見ることでコース受講者の日本語到達レベルを知ることができ、運営委員会では作文集の一部を留学生センターのホームページにのせてはどうかという提案もいただいた。使用した写真の著作権なども含めて今後検討していきたい。

この授業に対して学生はかなり積極的にとりくみ、授業時間外にも練習をしていた。ほとんどの学生は自国でコンピューター使用の経験があったため、授業はスムーズに進めることができた。学生の感想には「これまでeメールで英語、またはローマ字しか使わなかったが、この授業のあと日本語でメールを書くことができた」「ペンで書くより簡単で、早く書ける」といった肯定的な意見が多かった。

今後もコンピューターの授業をコースの中に組み込んでいきたいが、時期や方法などについては、さらに工夫する必要があると思われる。

2．2．4　スピーチウィーク

12月17日から21日まで、スピーチウィークを設けた。この期間、毎日2～3名の学生が国の紹介のスピーチを行った。スピーチをこの時期に設定したのは「しんにほんごのきそ1」が終わり「2」へ移行するにあたり、どの程度のことが日本語で言えるようになったかを、確認するためである。スピーチウィークの5日間は、毎日1時間目の授業を65分は通常の授業を行い、後半の25分をスピーチ発表にあてた。この週は受講者の指導教官と、教育学部の日本語教授法を受講している学生が授

業を見学した。

このスピーチウィークは第２期のオープンクラスに比べて受講生のストレスの度合いは低かった。これはクラス見学者に日本人学生が多かったことが原因の一つではないかと考えられる。授業の流れの中で日本人学習者に発言を求める場面も多く、受講者もこれを楽しんでいたようだ。

このクラスではタンザニア３名、インドネシア２名、ミャンマー２名と複数の学生が国の紹介をしたが、事前に紹介する分野を決めてリレー形式で紹介が進められたため、流れがスムーズだった。また、ゲストがいたことでかなりフォーマルな形のスピーチを行うことができた。

「国の紹介」はこのレベルの学習者にはとても有意義なタスクである。このスピーチでは「～は～にあります」「～は日本より大きいです」「～で～が有名です」「～の人は～がすきです」といった文型が無理なく多用される。「国の紹介」は日本人との会話の中で必ず出てくると思われる話題であり、学生によっては日本の小学校や中学校に招かれて話をする機会もあるため一度練習しておく必要がある。このスピーチでは写真や地図を拡大コピーしてパネルを作り、パネルを示しながら説明するといった方式をとったが、これもプレゼンテーションの方法の一つとしてコース修了後も役立ててもらいたい。

3　コース修了者の問題

研修コース３期を終え、コースの問題点も見えてきた。最大の問題はコース修了後その後も継続して日本語のクラスで勉強する学生が少ないということだ。３期を通して受講者の日本語に対する関心は高く、非常に熱心に学習に取り組むが、コース修了後、それぞれ専門の研究室に入って行った後、日本語の学習が途切れてしまうケースが多い。

研修コース修了者は３期合わせて29名で、うち５名がコース修了後他大学に移っている。のこり24名のうちコース修了直後の学期に日本語の授業を受講しているものは８名にすぎない。このように日本語の学習が途切れてしまう理由には、専門の勉強が忙しくなり授業をとることができないといったことがあげられるが、個人的に話を聞いてみると、日本語そのものに対する関心が失われていたり、日本での生活全般に意欲を失っていたりする者もいる。

研修コース受講者は修了後専門の学部で研究をはじめるが、英語で研究を進める者がほとんどで、日本語は研究室の日本人学生や地域のボランティアとの会話に使うといった、使い分けをしているようだ。限られた留学期間に学位をとる事が最優先で、その結果日本語にあてる時間が少なくなってしまうのだろう。

研修コース受講者のこのような傾向はおそらく今後も変わらないと予想される。このような傾向をふまえて、研修コースのあり方を考える時、二つの方針が考えられる。一つはコース修了後、日本語の学習が続かないわけだから、コースの教授項目をできるだけ増やし、コース修了後日本語で困った時には自分で問題解決ができるような道筋を示しておくという方法である。具体的には、初級の後半にあたる文法項目については、定着を図るというよりできるだけたくさん紹介するといったスタンスをとり、コース修了後、どこをどう調べればいいかわかるようにする。もう一つの方法

は、各項目に十分に時間をかけて十分に定着するまで練習し、コース修了後も覚えたことを忘れないようにするという方法である。ただし、この方法は教授項目が限られてしまうという欠点がある。

まだ現段階では研修コースをどのような方針で設定するか、結論は出ておらず、今後も検討を重ねて行く必要がある。またあわせて、鹿児島大学日本語一般コースへの橋渡しがスムーズにできるような措置を講じる必要も出てくるだろう。

4　指導教官とのかかわり

2期生、3期生とも日本語研修コースに在籍中もよく指導教官の研究室を訪ねていたようだ。特に理系の学生は研究室で実験をしたりするなどしていた。教員研修生は理系の学生ほど研究室への出入りはなかったが、受け入れ教官との問題はあまりなかった。宮崎大学の学生はメールで指導教官と連絡を取り合っており、大学院入学試験の情報なども適宜得ていた。

宮崎大学についての情報は我々もまだ十分には持っておらず、近々、宮崎大学を訪問し、指導教官への説明や、コース修了生へのインタビューなどを行わなければならないと考えている。

5　ま　と　め

3期を終え、問題点や取り組むべき課題もかなり明確に見えてきたようだ。研修コースは現在学習歴ゼロの学習者を対象に開講しているが、将来的には既習者クラスの増設も考えられる。また、大使館推薦の国費研究留学生だけでなく、さまざまなバックグランドの受講生が教室に混在するだろうことは想像に難くない。その中でこの研修コースはどのような方針で進んでいくのか、十分に議論を重ねていきたいと思う。